

ベトナム中部高原地域・山地民社会における土地意識・制度と 慣習法に関する研究

—近代国家の理念とローカルな社会で生成される信念の相克—

平成 19 年入学

参加したフィールドスクール：ベトナムフィールドスクール

調査地（調査国）：ベトナム社会主義共和国

下條尚志

キーワード：土地制度、開拓、現金作物、慣習法、焼畑農業、コーヒー栽培

自分の研究テーマについて（600 字以内）

本研究は、ベトナム社会において最も政治的周縁地域であり続ける中部高原・山地民社会における土地意識・制度と慣習法の分析を通じて、ローカルな社会で生成されてきた土地や法の考え方が、近代国家理念との相克のなかでどのように変化し、また人々のあいだで実践されてきたのかを考察することを目的とする。

これまで植民地支配、ベトナム戦争、社会主義を経験してきたことによって、山地民の焼畑耕作や土地の利用、儀礼を規定している慣習法などの伝統文化は衰退していく一方であるといわれてきた。しかし逆説的に、度重なる政権交代や戦争による無秩序、社会主義政策の失敗がもたらした法整備の遅滞が原因で、山地民社会は近代国家ベトナムにとって常に政治的周縁であり続け、不完全な国家制度に対して、ローカルな土地や法の信念を維持、再編、強化してきたとは考えられないだろうか。

1954 年ベトナムにおいて平地民キン族による政権が成立して以降、肥沃な中部高原にコーヒーなどの農園労働者としてキン族を中心とする開拓移民が激増し、数多くの山地民はコミュニティの崩壊や土地の手放しをよぎなくされ、キリスト教に改宗する者もいた。しかし、中部高原地域がこのような激的な社会変容を経験してきたとしても、山地民社会における目に見えない精神文化は、未だ強く人々の土地や法の考え方を規定しているものと推測される。



中部高原・山地民社会で広くみられるゴング文化。

フィールドスクールから得られた知見について（600 字以内）

今回のフィールドスクールを通じて、筆者が学んでいる地域研究が NGO などの実務家の活動と似ており、同じような問題を抱えていることを理解することができた。たとえば、村落の住民となにげない日常的な交流を重ね、信頼関係を築き上げることが支援活動に取り組む前の前提である点、そのうえで住民が一体何を考えているのかよく理解し、どのように活動をおこなうことが適切なのかを決定してい

る点などである。つまり、可能な限り相手の立場に立って地域社会を理解しようとする姿勢は、筆者のような地域研究者が多いに学ぶべき点である。

今後フィールドスクールで得た実務家の人たちとの人脈を生かし、地域研究者と実務家が交流し意見を交わす機会が増えれば、互いに影響を与えあい、地域理解がさらに深まるであろうと思う。改善すべき点は、第1にフィールドスクール期間、参加者が十分に休息をとれなかったことが挙げられる。病気を治し、体調を整えるためにも、スケジュールのあい



村で催された宴会。酒を拒否することは許されない。

だに中日（なかび）を設けるべきであると思う。第2にフィールドスクールを実施する前

に、まず日本で予備学習をおこなう必要があることが挙げられる。筆者はベトナムが研究対象地域であったためある程度の予備知識はあったが、基本的な知識をもっていない場合、フィールドスクールで得られる知見が限られたものになってしまう恐れがある。

フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？(400字以内)

ベトナム北部の山地民であるムオン族の村落に滞在し、村民に聞き取り調査をできたことは、ベトナムの山地民社会の状況を理解するうえで有意義であった。たとえば、政府が1980年代半ば頃から教条的な社会主義路線を改め、市場経済を取り入れたドイモイ(刷新政策)路線に修正し、私有地の所有権を事実上認めたあと、ムオン族の村内で土地所有をめぐる混乱があったという村人の話は、筆者の研究に多いに資するものであった。

筆者は博士予備論文ではベトナム中部高原地域における土地政策のことについて書いたが、マクロな視点でベトナムの土地政策を理解するうえでも、今回のフィールドスクール



野山で捕えられた子豚の丸焼き。

で訪れたムオン族の村での調査は大きな成果であったと考えられる。今後はベトナム一国の枠組みを越えた、グローバルな視点で研究対象地域を捉えていくことを目標としているため、もし他国のフィールドスクールに参加できる機会に恵まれたならばぜひ参加したい。